

第四章 “血分け”の誹謗中傷

一、証拠なくデツチ上げた卓明煥氏

さて、反対派が脱会説得の際に用いる統一教会中傷の一つに、いわゆる「血分け」があります。統一教会では「血分け」を実践しているというのです。その批判内容は、時ととも微妙に変化してきました。

1975年に出版された山口浩著『原理運動の素顔』には、次のようにあります。

「血分け」の方法は、といえば、教祖に献血してもらうのではない。ヤクザの義兄弟の契りのように血をすすり合うのでもない。教祖サマにセックスをしてもらうことによつて「血分け」を行なうのである。従つて、教祖サマからの血分けは、女性しかできない。その女性から今度は男性が分けてもらふ、というように、男↓女↓男と互いちがいに行なうのだ。

しかも、女性から男性が分けてもらう時は、女性が上になり、またがつて行ふ法、下世話にいえば「騎乗位」でおこなうんだそう。有難い儀式だから、あくまでもおごそかに、

決してみだりに、ああ、イイ、なんていつてはいけないそうである（とは憶測である）。しかも、立会人がいる場合もあるというから、決して快樂だけが伴うものでもなさそうである」（144ページ）

ジャーナリストの山口浩氏の説明によれば、統一教会では、セックスリレーを實踐していると言うのですが、これは事実無根です。拉致監禁され、反対牧師の説得で脱会した元信者の中でそのような経験者は一人もいません（いくつかの靈的集団、例えば禹明植集団などは、禹氏が複数の女性との間で子女をもうけているようですが、それらの集団は、絶対純潔を説く統一教会とは無関係です）。

長年、脱会説得をする中で、セックスリレーの経験者が一人もないことから、反対派の批判は微妙に変化していきました。現在はやっていないが、古い幹部はしていたと言うのです。しかし、777家庭や1800家庭などの古参信者の中にも、そのような経験者がいないと見るや、いつしか韓国の古い幹部の36家庭だけが、血分けを實踐していたという批判に変化します。

例えば、1990年4月20日に出版された川崎経子著『統一協会の素顔』には、「最初の3組と33組は、実際に文鮮明の血分けを受けたと指摘されている」（235ページ）と

なっています。山口浩氏の批判書から15年後に出版された川崎牧師の著書になると、それが「36家庭だけ」となっており、統一教会全体が、血分けをしているという批判は消えているのです。

1993年10月27日、某テレビ局のワイドショーに36家庭の元信者や、血分けの中傷の草分け的存在である卓明煥氏らが出演しました。その番組は、朴正華著『六マリアの悲劇』（恒友出版）の出版を取り上げたものでした。

そのとき、ワイドショーの司会者の「文教祖との間で血分けはあったのか」との質問を受けて、36家庭の元信者が「自分たちには、血分けはなかった」と否定したのです。そればかりでなく、長い間、血分けの中傷をしてきた卓氏自身も、「統一教会は教理的にはセックス教理だが、今まで実際には証拠がなかった」と発言したのでした。

つまり、反対派の「36家庭までは血分けをした」という批判には、何の根拠もないのです（最近では「3家庭だけ」と批判する反対派もありますが、これも事実無根です）。何の根拠もなく批判し続けてきたという事実は、驚くべきことです。

最大の問題は、卓氏の無責任さです。同番組に出演した朴正華氏は後に、『私は裏切り者』（世界日報）で、次のように述べています（朴氏は、祝福を受けられなかったなどの恨みから『六マリアの悲劇』を出版し、反対派の、血分けの中傷の一翼を担いますが、

その後、悔い改め、『私は裏切り者』を出版しました。

「テレビでは、『血分け』の話が出てきたので、三十六家庭の劉孝敏氏に注目が移り、劉氏の妻が文氏とセックスをして『血分け』をしたのか、という質問が出た時は緊張した。

もし、劉氏がこれを認めれば、『血分け』があつたことが立証されることになる。有田（芳生）氏や中村（敦夫）氏が言う通り、多くの批判書に書いていることが事実と裏付けられるのである。しかし、大方の期待を裏切つて、劉氏は『血分け』を否定した。自分たちが祝福を受けたとき、文先生との『血分け』はなかったといったのである。

ただ、その時、先生が、ほんとうは自分がセックスして復帰するのが本当だが、いろいろ仕事があつてできないから、自分たちでやりなさいと言つた、とデタラメ話を作つてごまかしたのである。

これは、作り話である。なぜなら、後で劉氏が、『日本のテレビがあんまりいろいろな言から、せめてあの位は言わなくては。作り話だよ』と言つたからである」（223～224ページ）

「卓氏が、何の証拠もないまま今まで20年以上も、よく統一教会を『淫行教団』だと糾弾し続けてきた、という余りのデタラメぶりに驚きあきれた。

結局、反対派グループの実態はそんなものである。だれかがあ言つた、こう言つたと言つて、それを既成事実にデッチ上げてしまう。……（私も）同罪であるから言えた義理ではないが、みんなが『統一教会はセックス教団』と合唱し、そのレッテルはりを一生懸命やっていたのである。

だから、普通に考えれば、証拠もなしになぜ20年も反対していたのか、と質問するものだが、まともな学者やジャーナリストなど一人もない番組ではだれもそうはしなかった」（224～225ページ）

実は、拉致監禁による脱会説得の手法を生み出した森山諭牧師の『血分け』のニュースソースが、この卓明煥氏なのです。

森山諭著『現代日本におけるキリスト教の異端』（以後、『……異端』という）には、『血分け』が断定的に述べられています。その情報の根拠が明示されていません。しかし、1974年10月12日号「キリスト新聞」を読むと、森山牧師の『血分け』の情報提供者が卓氏であることが分かります。結局、森山牧師は、何の証拠もないまま統一教会は『血分け』をしているという卓氏の発言をうのみにし、まるで自分が見てきたかのように書いていたのです。実に無責任です。

名誉毀損にも当たりにかねない情報を書く場合、その情報が事実かどうかの裏付けを取り、極めて慎重に記載すべきです。ところが、卓氏自身が「証拠はなかった」と平然と言っているのです。そのような事情を知らないまま、森山牧師の『……異端』を読むと、統一教会はム血分けをやっていているという動かし難い証拠があるという印象を受けてしまいます。

日本の統一教会批判書の草分けとしての『……異端』の無責任な発言によって、どれほど多くの人々が統一教会を誤解し、また憎み続けてきたことでしょうか。

文師は、言われなきことを言われながら誤解されてきたのです。統一教会問題の本当の犠牲者は、実際のところ、事実無根の内容で誹謗中傷され続けておられる文師自身であると言えます。無責任な批判を、数十年間以上も行ってきたのは、犯罪的とも言えます。反対派は、これらの言動の責任を、どう取るつもりでしょうか。

このようにして始まった反対牧師によるム血分けの中傷を聞かされることで、数多くの信者が、自分では目撃したことも、体験したこともないにもかかわらず、その批判に踊らされて脱会に追い込まれたのです。

二、ム血分けの中傷のルーツ

山崎浩子さんが反対牧師から説得を受けて脱会したころ、元信者がテレビに出演し、それに追隨するかのように、反統一教会ジャーナリストや反対牧師も一緒になってム血分けキャンペーンをしました。

元信者の誰一人として体験者や目撃者がいないのに、どうしてそこまで断言できるのでしょうか。すでに90冊を超える統一教会批判書が出版されていますが、その批判書の多くにム血分けの中傷が書かれています。「嘘も百回繰り返せば真実になる」で、中傷が繰り返されるうちに、元信者はそれを信じ込まされたのだと言えます。まさに洗脳です。批判書に書かれたム血分けの情報がどこから出てきたものであるかをそれぞれの本を読み比べて情報の源流を調べると、結局、ム血分けの中傷のルーツは、韓国で出版された金景来著『社会悪と邪教運動』（著作日付1957年7月15日）という一冊の本であることが分かります。

この書は、日本語に翻訳されて、『原理運動の秘事』という書名で、1967年12月20

日、韓国書籍センターから出版されました。

金景来著『社会悪と邪教運動』は、もともと朴泰善牧師の率いるオリーブの木教会（伝道館）を批判した書籍であり、統一教会に触れた部分は1割にも満たません。その翻訳本を出版するときに、わざわざ『原理運動の秘事』という書名にすること自体、非常識です。おそらく、翻訳者や出版社に「統一教会を批判しよう」との意図があつてのことでしょう。この金景来氏の著作のあり方や、その出版姿勢に対しては、反対派の中からも問題点が指摘されています。

例えば、日本共産党機関紙「赤旗」の元記者、萩原遼著『淫教のメシア・文鮮明伝』（晩聲社）には次のように書かれています。

「この金景来氏の著書は、血分け教にたいする批判に急なあまり、金百文のいっていいことを勝手につけ加えたり、筆者の金景来氏のことばを金百文のことばとして引用符でくくったりする文筆家の守るべき初歩的なルールに反した部分が少なくない」（96～97ページ）

金景来氏が著作した1957年前後は、1955年5月11日、梨花女子大学の教授や学

生の10数名が統一教会の信仰をめぐって退学処分を受ける、いわゆる「梨花女子大学事件」が起こり（『韓国日報』同年5月23日付、「東亜日報」同年5月17日付、「ソウル新聞」同年5月15日付）、やがて、同年7月4日に、さまざまな憶測が飛びかうなか、文師と統一教会幹部4名が「兵役法違反および不法監禁等の嫌疑」で治安当局に拘束されるという事件が起こりました。巷では、統一教会は「淫乱宗教」であるという風聞が流されていたのです（『京郷新聞』同年7月6日付、「平和新聞」同年7月30日付）。

金景来氏は、そのときの風聞（文師には姦通の疑いがあるのではないかなど）を基に、統一教会の部分を著述したと言えるでしょう。

しかし、文師はソウル地検にて「兵役法違反」の嫌疑で取り調べを受けますが、姦通嫌疑に対する告訴自体、なかったのです。そして兵役法違反についても、同年10月4日、ソウル地方院で「無罪」を言い渡され（資料、「平和新聞」同年9月21日付、「京郷新聞」1955年10月5日付）、身の潔白が証明されているのです。

そのような歴然とした事実があるにもかかわらず、どうして「血分け」の中傷が相変わらず続けられていったのでしょうか？ それは、反対派の人々に、何としてでも「文師を貶めよう」とする動機があつたからに他なりません。

当時の新聞を読めば、文師が拘束されたのは「兵役法違反」の問題であつたのが分かり

ます。また、韓国の法廷記録の正式コピー文書（1974年7月1日付）にも、「Violation of Military Draft Law」と明記されており、それが兵役法違反であったことが明確です（『OUR RESPONSE』253ページ）。

このム血分けの中傷のルーツを探っていくと、結局、その源流は、単なる風聞でしかないことが分かるのです。

三、元赤旗記者の萩原遼氏の著書について

反対牧師が、よく脱会説得に用いる書籍に、萩原遼著『淫教のメシア・文鮮明伝』（晩聲社）があります。反対牧師は、この書を根拠にム血分けの中傷をしてきました。

例えば、「教団新報」1986年4月26日号に、川崎経子牧師が信者を脱会説得するとき、それを読ませて動揺させたとあります。同様の記事が「教団新報」1987年4月4日号の第2面、同1987年11月7日号の第1面にも記載されています。

また、小出浩久氏の証言によると、「松永牧師自身は……共産党機関紙『赤旗』の元記者が書いた『淫教のメシア・文鮮明伝』（晩聲社刊）などに書かれていることを根拠に、文鮮明師に対する罵詈雑言の限りを尽してきた」（『人さらいからの脱出』光言社、49ページ）と言います。反対牧師たちは、この萩原遼氏の著書を利用（悪用？）しながら、統一教会信者を脱会させるための説得を行ってきたのです。

では、萩原氏は何をもってム血分けがあると言うのでしょうか？

1、鄭鎮弘氏の『推論』に基づいた論文

萩原氏は、まず韓国神学研究所の研究誌「神学思想」75年秋号掲載の鄭鎮弘氏の論文「宗教祭儀の象徴機能」をその根拠とします。萩原氏は、次のように述べています。

「血分けは、統一協会発祥の日より今日まで25年にわたって連綿とつけつがれてきたのだ。その事実がわかったのは、ソウルから筆者の手もとに届いた一冊の学術雑誌からだった」(10ページ)

「240ページにおよぶ朝鮮語の学術誌を読みすすめるなかで、『宗教祭儀の象徴機能』の論文にきて、筆者はおどろきから声をあげそうになった。……集団結婚式こそ血分けの儀式にはかならないとはつきりと書かれているのである」(16ページ)

萩原氏は、鄭鎮弘氏の論文をベースにして、統一教会では『血分け』をやっているという著述を進めています。

では、果たして萩原氏がいうように、この論文が、『血分け』をしているという明確な証拠を提供しているのでしょうか？ 実は、この萩原氏の発言には、「虚偽」が含まれて

いるのです。

萩原氏は『淫教のメシア・文鮮明伝』の資料篇に、その証拠とする鄭氏の論文を翻訳して、収録しています(144～166ページ)。それを読むと、鄭氏自身は、「聖婚」や「祭儀的両性具有化」という観点から推論してみると、「少なくとも一定の段階までは(例えば三子女聖婚式や三十三組聖婚式までは)そうした『儀礼的性交』がおこなわれたであろうという可能性を完全に排除できない」(160ページ)、「『血分け』の現実性が推測される……」(164ページ)と述べているにすぎないのです。つまり、鄭氏は『儀礼的性交』がおこなわれたであろうという可能性を完全に排除できない」と推論しているにすぎず、具体的証拠は全くないのです。

ところが、萩原氏はそこから一気に飛躍して、血分けの事実が「はつきりと書かれている」といいます。これは捏造とも言える行為です。

しかも、この鄭氏の『推論』に基づいた論文自体が学問的には全く成り立たない内容であるという点について、末吉重人氏がその著書『統一教会批判へのワンポイント反論』(広和)において論じています(157～174ページ)。

2、元信者の筆記ノート

次に、萩原氏は、「朝日ジャーナル」1978年10月6日号記載の和賀真也牧師の文章を証拠にします（30ページ）。

この和賀牧師のニュースソースは元信者の筆記ノートです。そこには、萩原氏が期待する「文師と肉体関係を待たなければならない」という内容は一切なく、何ら証拠になっていません。しかもそれは、萩原氏が問題にしたがっている「血分け」に関するものではなく、あくまでも「夫婦間だけ」で行われる「三日行事」について、ある元信者がノートに書きまとめたものと思われるものです。これも、「血分け」の証拠には何らなっていません。

ところで、和賀牧師は、その著書『統一協会と文鮮明』（新教出版社）に、夫婦間だけで行う「三日行事」に関する質疑応答と思われる内容に、卑猥な表現と補足を勝手に書き加えて掲載しています（292～296ページ）。

また、川崎経子牧師は、「初夜の二つ一つの動作まで詳細な規定があるようだが、それが真実であるとすれば、とてもイヤラしくて、私にはそれを書く勇気がない」（『原理に入った若者たち』―救出は早いほどいい』42ページ）と述べています。萩原氏自身もその

著書で、この三日行事を「醜悪な儀式」（29ページ）と決めつけます。

しかし、夫婦の性生活について述べるのが果たしてイヤラしいことでしょうか。一般キリスト教でも信徒の指導として、テオドール・ボヴェー著『真実なる結婚』（ヨルダン社）、同著『性と愛の発見』（YMCA出版）、H・P・ダン著『愛と性と結婚生活』（サンパウロ）など、夫婦の性生活を具体的に指導した書籍が数多く出版されています。

3、名誉毀損となった元信者の証言

また、萩原氏は「血分け」に関する内部告発があったとして、金明熙氏（男性の元信者）の発言を証拠とします（34～40ページ）。しかし、金氏はこの件で、韓国の裁判によって「名誉毀損」などの罪で、1年6か月の実刑に処されている人物です。萩原氏はその事実を知っているながら、あえてそれを証拠としているのです。

しかも、著書のあとがきの末尾に（補遺）として、小さな文字で「告訴人金明熙氏は、訴状提出後、統一協会より名誉毀損で逆告訴され、敗訴し姿を消したといわれる。韓国中央情報部（KCIA）が背後にある統一協会を訴えることの困難さをあらためて示したと言える。だが、この『敗訴』がそのまま金氏の主張を無効とするものでないことはいうま

でもない。……金氏の告訴も、韓国の民主化の進展とあいまって、もう一度問い直される日がくると思う」（193ページ）と平然と言つてのけます。さすが、元赤旗記者と言わざるを得ない悪意に満ちた記述です。韓国の大法院が「虚偽の判決」をしたと言わんばかりの問題発言で、韓国の法廷への侮辱と言ふべきものです。

結局、萩原氏が「血分け」の証拠として取り上げた、元信者・金氏の発言自体も、何ら証拠になっていないのです。なお、金氏の裁判については、「ファミリー」1993年7月号（96ページ）に、その経緯が述べられています。

4、卓明煥氏の証言

さらに、萩原氏は「血分け」の証拠として、「韓国の研究者による研究成果によってあつてみよう」（前掲書、44ページ）と述べ、森山論牧師の著書と同様に、卓明煥氏の証言を盛り込みながら、独自の論述をしています。

この卓明煥氏の「血分け」の中傷が事実に対し、何の根拠もないことを統一教会側が追及した際に、卓氏は1978年9月、統一教会への「謝罪文」を発表しています。萩原氏はそのことを知っており、そのためか個別の名前を明記せず、あえて「韓国の研究者」と

あいまいに表現しています。また、巻末の〈補遺〉では「卓明煥氏が、その後、『あれはおどされて書いたものだ』とそのいきさつを公表し、反撃に転じた」（193ページ）と述べ、卓氏を擁護しているのです。

しかし、1993年10月27日放送の某テレビ局のワイドショーで、卓明煥氏自らが「今まで証拠がなかった」と真相を暴露したのですから、その情報をいくら書き綴ったところで、何ら証拠にはなりません。

5、金景来著『原理運動の秘事』

さらに、萩原氏は事もあるうに、萩原氏自らが「批判に急なあまり……文筆家の守べき初歩的なルールに反した部分が少なくない」と批評している金景来著『原理運動の秘事』をその証拠として挙げています。自ら「問題あり」とする書から、わざわざ引用している萩原氏自身にこそ、問題ありと言ふべきです。

しかも萩原氏は、金景来氏の著書を引用しながら、そこで改竄かいざんとも言える行為をしているのです。萩原氏は、「（文師は平壤で）広海教会という名称の教会を建て、その中心に納まった」（64ページ）と書いていますが、金氏の著書には、「文師が広海教会の中心に納ま

った」とは、どこにも書いていないのです。

金景来氏の著書には、「彼ら（李龍道牧師、黄国柱牧師の弟子）は広海教会という看板を掲げ、昼夜となく集まっては手を叩きながら賛美歌を歌うのであった。李、黄の兩人が分裂して引退した後、つまり八・一五解放を前後した時期にこの集団に一人の青年が登場したが、それが文鮮明であった。文は、その当時、国内で一流に属する富豪朴某氏の姑と、いわゆる彼らのいう清潔な性交をすることによって混淫派の上座につくようになった。ここで、彼らの元祖である李、黄と文鮮明の間には当然無名の混淫派一〇人余りが介在したとみるべきである」（『原理運動の秘事』43ページ）とあるだけです。

つまり、そこに書かれていることは、萩原氏が言うような、文師が「広海教会という名称の教会を建て、その中心に納まった」のではなく、広海教会の信徒が、李牧師、黄牧師の分裂後に、断定することはできないにしても、文師のもとに幾人かが集まってきたと推測される、としか読めない文章です。

萩原氏は、特定の意図に合わせるために、著者の言っていないことまでも、そこに読み込んで曲解しており、それこそ「文筆家の守るべき初歩的なルールに反した」ことを自ら行っているのです。

しかも、李龍道牧師と黄国柱牧師は共に活動したことがない別の集団であるにもかかわ

らず（閔庚培著『韓国キリスト教史』日本基督教団出版局、132～136ページ、および同著『韓国キリスト教会史』新教出版社、342ページ）、金景来氏は、李牧師と黄牧師と一緒に活動していたかのように書いており、金氏の著述自体の信憑性を問うてしかるべきなのです。そのような事実関係を確かめずに引用する萩原氏の著作も、「血分け教にたいする批判に急なあまり、金景来のいっていないことを勝手につけ加えたり……文筆家の守るべき初歩的なルールに反した部分が少なくない」類のものであると言えます。

ちなみに、萩原氏は、統一教会に「血分け」があったことの傍証として、張愛三というクリスチャン女性の証言を挙げています（69ページ）が、これも疑問符のつく金景来氏の著書からの引用です。しかも、その証言の使われ方が、金氏サイドにも、萩原氏サイドにも問題があり、二重、三重の疑問符を付さなければならぬものとなっています。

その張愛三の証言の問題点について、末吉重人著『統一教会批判へのワンポイント反論』（広和）は、次のように指摘しています。

「これも金景来氏の著書からの引用ですが、萩原氏は統一教会にいわゆる『血分け』があったという傍証に、張愛三というクリスチャン女性の証言を挙げています。張女史は牧師夫人であったとされますが、金景来氏の『原理運動の秘事』によると、張女史は1957

年3月18日付け「世界日報」(注、現在の「世界日報」とは異なる別の新聞)に自らの罪の告白を掲載しました。その中で張女史は、自分が牧師夫人でありながらいわゆる『血分け』を受けたとしたのでした。ところが、この告白文の中で張女史が批判しているのは、当時、教勢を拡大し、かつ多くの批判も受けていた朴泰善牧師(の集団)に外なりません。文師については、風聞に基づいての間接的批判しか展開していないのです。

つまり張女史は直接的には、朴泰善牧師との間でイザコザが生じたのに、これを萩原氏は統一教会との問題であったことにすり替えようとしているのです。金景来氏によると、それは張女史の夫の経営する孤兒院への寄付問題であったとされます(『原理運動の秘事』28〜38ページ)。

金景来氏はこの部分の書き出しで、張女史が統一教会の李泰允牧師と霊体を交換したことを、張女史の夫である白英基牧師が聞いたことから始めていますが、もしもこの李泰允牧師が統一教会の人物であつたなら、白牧師は統一教会と争うはずなのに、この後に続く文章は白牧師が朴泰善牧師と利害関係が対立したとの説明になっているのです。

したがって張女史と霊体を交換したとされる李泰允牧師は、朴泰善牧師側の人物でなければつじつまが合わなくなります。ここにも金景来氏の記述の信憑性のなさが伺われるのです(181〜182ページ)

ちなみに、この牧師夫人の〴〵血分け〴〵告白の件について、森山牧師の『……異端』は、情報の出所を明確にしないで、文師と牧師夫人が〴〵血分け〴〵をしていたとして、「韓国でこの運動が問題化したのは、文氏がある牧師夫人と血分け行為中、主人に発見されました。主人は牧師の立場上、苦しみながらも不問に付しましたが、その夫人は良心の呵責に耐えかね、公けの席上でそれを告白したことから、世論のひんしゆくを受け、マスコミを沸かしました」(114ページ)と書いています。

この情報は、内容から見ても、張女史の告白が他の風聞と混ざり合って、かたちを変えたものと思われます。森山牧師は、すでに文師との間で〴〵血分け〴〵があつたとしており、風聞は人から人へ伝わるうちに〴〵変貌を遂げる〴〵恐ろしさを感じさせます。

以上のように、改めて検証してみると、萩原氏が証拠として挙げているものは、すべて証拠になっていません。これでは、萩原氏の論述すべてが捏造ねつぞうと疑われても仕方ありません。

6、萩原氏の驚くべき事実誤認

萩原氏の著書にはさらに驚くべき「事実誤認」があります。実は、萩原氏は、文師が李龍道牧師から直接「血分け」を教わったかのように書いているのですが、李牧師は、文師が故郷・定州におられた13歳の時、すでに客死しており、二人は直接会ったことはありません。それにもかかわらず、萩原氏は次のように書いているのです。

「文は混淫・血分けという醜悪な教義とその実技を学んで目を開かれた。……一九四六年六月六日、またも『神の啓示』で文は北朝鮮の平壤に行く。平壤は当時、混淫・血分けの本拠であり、李龍道や黄国柱というこの道では知られた『教祖』たちがいた」(52ページ)

「この李龍道の集会では『汎性欲主義的な原理を集会のたびごとにひそかに教えた』のであった。ところが、十代半ばのころの文鮮明の経歴を統一協会はひた隠しにしており、霧につつまれている」(55ページ)

「十代半ばの文は、李龍道の説く『愛の講論』にすっかり酔いしれてしまい、はじめてきかされる未知の世界にがく然として異常な興味を覚えたのである。そして、学業もそつちのけでこの教理に沈溺した」(56ページ)

「統一協会の公式文献によると、十代のころの文鮮明はいったいなにをしていたのか。学校に通っていたことと16歳のときの神の啓示しか出てこない。まして、このころに、血分け教の開祖である李龍道のもとに通っていたことなどおくびにも出していない」(57ページ)

萩原氏は、まるで文師が李龍道牧師と直接会ってでもいるかのように滔々と述べています。ここで、萩原氏は完全な創作をしており、すでに死んでいる李牧師が生きているものとして書いているのです。これでは、著作全体の信憑性が疑われる、驚くべき事実誤認です。

(注) 文師がソウルへ行かれたのは、1938年春、京城商工実務学校電気科に入学されたときで、満18歳です。ところが、萩原氏は54ページで、1934年春、ソウルの五山高等普通学校に編入したと書いています。これも明らかな事実誤認で、文師が1934年に編入されたのは、定州にある私立五山普通学校です。このような間違いを平然と犯しています。いずれにせよ、この時すでに李牧師は死去していました。

萩原氏は、日本共産党機関紙「赤旗」の記者であり、この著書が出版された80年ころは、日本共産党が連日、「赤旗」で統一教会を誹謗中傷していた時期でした。

統一教会に対して悪意を抱いていた萩原氏は、その延長上で、言わば「初めに結論ありき」の立場から「血分け」の中傷をしているのです。

客観的証拠が一切なく、ただ悪意から書かれた書籍を用いた脱会説得によって、多くの統一教会信者が脱会させられてきたのです。

7、萩原氏が挿入した写真資料

萩原氏の著書には、視聴覚に訴える「写真資料」が、まるでここを注目しろと言わんばかりに、紙の色を変えて、書の中央部に挿入されています。それを見る者に、「萩原氏は文鮮明のプライベートな秘密まで調べ上げているようだ」という印象を与える、一種の権威付けにもなっています。

川崎経子牧師がこの書を用いるときにも、まずこの写真部分をわざわざ使用するの、そのためだと言えます（『教団新報』86年4月26日）。また、浅見定雄氏も「萩原遼『淫教のメシア・文鮮明伝』97ページの一枚前に収められている写真を見られるとよい」（『統一協会Ⅱ原理運動』213ページ）と、写真に注目させる記述をしています。

ところが、よくよく写真を見ると、そこに「血分け」を裏付ける写真が一枚もないとい

う事実気付かれます。

私たちが写真を見る場合、写真を写したカメラマンがそこにいるということを、意外と忘れがちです。特に、自動シャッターが普及されていない時代の写真なら、そこには写した人も同席しているはずです。特に、文師の生活ぶりは、ほとんど公的な時間として過ごしておられるために、いわばこの写真すべてが公的な状況下で撮られたものと言えるでしょう。

そういう観点から見直していくと、いわゆる「イヤらしい」という写真は存在していません。唯一、22番の韓鶴子女史が、乳飲み子に母乳を飲ませている写真が、見る人によっては、多少疑問符を与えるかもしれませんが、純真な心で見ると、母親が乳飲み子に乳をふくませる姿は、ある意味で美しいものと言えるでしょう。

「写真資料」部分で問題なのが、一枚一枚の写真に付けられた萩原氏自身による説明文です。萩原氏の写真説明文は、実にいい加減な情報で埋めつくされているのです。

例えば、萩原氏が文喜聖だとして説明した写真33番は、文喜進様の写真です。萩原氏は、架空の名前を作り上げて、「文師には隠し子がいる」というイメージをつくろうと画策しているのではないかと疑いたくなります。極めて陰湿な手法と言わねばなりません。

また、萩原氏は、統一教会の国際合同祝福結婚式の際に用いる「聖酒」についても勝手

に憶測して、次のように批判しています。

「二人の『愛の象徴』とはなにかについて書くこともはばかるような内容が巷間こうかんにいわれているが、それは別にしても血を飲ませるといいうのもゾツとする話ではないか。集団結婚式の体験者が目撃したところによると、文鮮明は、大きな酒樽に自分の指を切って血をしたたたり落としたという」(22ページ)

では、萩原氏は、どのような根拠をもって、聖酒の中身について、このような思わせぶりの発言をするのでしょうか？

萩原氏は、文師の語った「聖酒は何が入っているか」というと、それは父母の愛の象徴が入っている。それから血が入っていないといけない」の言葉を、その根拠として挙げています。「書くことはばかる」というのは、精液が入っているとでも言いたいのでしょうが、そのようなことを、文師は一言も述べておられません。

確かな証拠もないまま、文師が語った言葉から邪推して言っているのです。実に、無責任な発言です。

精液の風聞は、前述の金明熙氏(男性の元信者)が語った虚偽発言であって、す

でに韓国の裁判で「名誉毀損罪」に問われている内容です(参考…「ファミリー」1993年7月号、96ページ)。そのことを知っているからでしょう。萩原氏は、あえて金氏と言わず、「巷間で言われている」としているのです。

さらに、血液が入っているかどうかの問題ですが、これは実名抜きを目撃証言という単なる風聞で、何の証拠提示もしていません。

イエスが、「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければあなたがたの内に命はない。……私の肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人になる」(ヨハネによる福音書6章53～56節)と発言したこと、初代キリスト教会時代には、クリスチャンが「ぶどう酒」を飲んでいる姿を見て、民衆が「赤子の血をすすっている」と、あらぬ噂うわさを流しました(参考…ケアンズ著『基督教全史』聖書図書刊行会、125ページ)。萩原氏は、それと同様の過ちを繰り返していると言えるでしょう。

統一教会の機関誌には、すでに「聖酒に血液は入っていない」との公式見解が出されています(「ファミリー」1997年8月号、58ページ)。

四、反対派に乗せられて書いた朴正華著『六マリアの悲劇』

統一教会に対する〃血分け〃の中傷は、1950年代半ばから絶えず行われてきました。しかし実際は、卓明煥氏が告白したように、「明確な証拠は何もなかった」のです。おそらく、反対派の人々は、このような状況にしばれを切らしていたに違いありません。

統一教会を貶めるために、何としてもその証拠になるものを提示したいと切望していたところに、問題の書、朴正華氏の『六マリアの悲劇』（恒友出版）が登場してきたのです。朴氏は、その後、心を入れ替えて、『六マリアの悲劇』で書いた文師のセックス・スキャンダルは、すべてでっち上げだったとして、新たに、真相告白の書『私は裏切り者』（世界日報社）を出版しました。

では、著者の朴氏が〃でっち上げ〃であることを自ら暴露した、この問題の書『六マリアの悲劇』は、どのようにして出版されることになったのでしょうか。その経緯について、朴氏は『私は裏切り者』の「はじめに」で、次のように述べています。かなりの長文ですが、重要ですので次に引用します。

「当時（1993年）、日本では、韓国で行われた三万双国際合同結婚式以来、統一教会に異常な関心が集まっていた。そこに、教会の草創期を先生とともに歩んだ男が、『真のサタンは文鮮明だ』と銘打って、ありもしない先生の『セックス・スキャンダル』をブチ上げたのだから、これは一大事件である。統一教会批判のネタ漁りに余念のない反教会ジャーナリストが、黙って指をくわえたまま放って置くはずがない。

たちまち私は、統一教会バッシングに便乗、相乗りした週刊誌やテレビ・ワイドショーの寵児ちやうじとなつてはやされた。

なぜ、大恩ある先生をマスコミに売るような信義に悖もとることをしたのか。

それは先生に対する憎しみ、抑えることの出来ない私憤のためである。私は『六マリアの悲劇』を、先生と差し違える覚悟で書いた。先生の宗教指導者としての生命を断ち、統一教会をつぶして俺も死ぬ、そんな破れかぶれな気持ちだった。だから、ありもしない『六マリア』までデッチあげたのである。

昔から宗教指導者を陥れるためには、セックス・スキャンダルほど効果的なものはない。聖なるものを泥まみれにして叩きつぶすには、その最も対極にあるセックス・スキャンダルほど有効な手段はない。そのことは誰もが知るところで、私もその卑劣な手段に手を染

めた。

『生きるも死ぬも一緒』とまで誓った男と男の約束を、自ら裏切るほどの憎しみが生じたのは、なぜか。その赤裸々な告白が、この本の一つのテーマであるが、ここでかいつまんでお話ししよう。

私は夢で、文先生が『再臨のメシア』だと教えられ、一緒に生活する中で、多くの奇跡を体験してきた。だから、先生が再臨のメシアであると確信できたのである。ところが、人間とはおかしなもので、いくら夢のお告げを聞いて体験しても、めまぐるしく移り変わる現実生活がだんだん自分中心になっていくと、それにつれ自分自身も見失っていく。そうなる、神の摂理のために公的に生きる先生まで、自分中心にしか見られなくなる。統一教会の教勢が発展していくにつれ、優秀な人材が教会に入ってくる。摂理を進めるために、先生がその人たちを活用する。

そういう時、私は何か自分が疎外されているを感じ、愛の減少感にとらわれ、孤独の淵に落ち込む。そうになると、なかなか立ち直れない。真理を学ぶ気持ちもおきないし、祈る気持ちにもなれない。ただ、寂しさだけがひたひたと募ってくる。自分だけのことしか意識のいかない、そんな世界を乗り越えることは難しいことだ。

その時、自分の心に何かが囁きかけてくる。あなたは正しいんだ。あなたを認めない相手が悪いんだ。そんな相手は倒さなければならない―と。強烈な自己正当化と相手に対する批判と憎悪。

聖書には、イエス様を裏切る前のイスカリオテのユダに『サタンが入った』と書かれているが、そのような得体の知れない冷たい思いこそ、サタンの囁きかも知れない。これにとらわれると、だんだん居ても立ってもいられなくなる。

お前を裏切ったのは文先生の方だ。お前は先生にだまされている。先生は身内のものを身近におき、先生のために苦労したものを無慈悲にも捨て去った。その証拠に、お前も追い払われたではないか。憎め！ 悔しがれ！ 復讐だ！ 彼を倒すために何でもやれ…。

こんな時に限ってよくしたもので、日本の出版社から『おいしい』出版話が持ちかけられた。金に困っていた当時の私には、願ってもない話だった。『朴先生の本だったら二十万部は売れますよ』と。

〈定価一五〇〇円の印税一〇%、一部につき百五十円で、二十万部だと三千万円（韓国のウォンで約二億一千万ウォン）が手に入る計算になる〉と、ついその気になり、とんでもない本を出してしまった」（2～5ページ）

朴氏は、統一教会の草創期を歩んだ、数少ないメンバーの一人でした。しかも、興南の

德里特別労務者収容所で文師とめぐり会った、古参信者の一人でした。ところが、後から入教してきたメンバーが自分より優遇されて用いられていく姿を見て、寂しい思いにとらわれ、やがてその寂しさが憎しみへと変貌を遂げていったのだと言います。

その憎しみに取り憑かれてしまった朴氏は、まさに「魔がさした」かのように「とんでもない本」をでっち上げて出版しようと思ったのです。そのことを知った反対派の人々が放っておくはずがありません。願ってもない獲物が来たと言わんばかりに、朴氏に急接近し、うまい出版話を持ちかけていったのです。

このようにして、朴氏は統一教会反対派のジャーナリストやキリスト教関係者らから持ち上げられ、センサーショナルにマスコミでも取り上げられるようになりました。そして出版されたのが『六マリアの悲劇』だったのです。

しかし、朴氏はその後、『六マリアの悲劇』の内容は、「文師に対する個人的な恨みからでっち上げた作り話で、真相はこうである」として、約2年後の1995年11月1日、『私は裏切り者』（世界日報社）を出版したのです。そうなった経緯について、朴正華氏は次のように語っています。これも長文になりますが、次に引用しておきましょう。

「『六マリアの悲劇』を出版した後、私は本の販売キャンペーンのため日本全国の反統一

教会グループの集會に顔を出し、本のPRをして歩いた。キャンペーンの反応は悪くなかった。私の期待は膨らんだ。しかし、意気込みに反して本はあまり売れなかった。

そんなある日、ソウルの安炳日氏から仁川の自宅に電話が入った。会いたいというので、気軽にOKをした。

仁川から電車でソウルに出て、待ち合わせたロッテホテルのコーヒショップで彼と会った。

私は当然、彼が私の本の出版を非難してくると思っていた。そうしたら、その場で殴ってやろうと思った。そして、この本をさらに英訳して世界に公表しようと思っていた。たまたま、日本の反統一教会グループから、再び全国巡回講演の依頼を受けていた時でもあった。

『朴先生、お元気ですか』

にこにこして挨拶する彼に、私は『あーっ』とあいまいな返事をしながらコーヒを飲み始めた。

私は、先生を裏切る行為に出た理由を、一つ一つ語った。

『棲鎮鉦山に追いやられ、何の援助もなかった』こと。

『教会に戻ろうとしたが、組織が出来上がっていて、もう自分の位置がなかった』こと。

『後から来た者に『はい、はい』と頭を下げる事ができない』ことなどである。さらに『ダンベリーに七回も手紙を出したのに返事がこない』こと。

『一和の金元弼社長に二十回も電話したが、返事もこない』ことも付け加えた。自分の主張をまくしたてたあと、教会を出た後に反教会グループの者から聞いた悪口も、怒鳴るように大声を出して吠えた。

彼は、私の話をたっぷり二時間の間、黙って聞いてくれた。

それで、私の心はすっきりした。

安氏はそれから、問題の一つ一つについて丁寧に説明してくれた。

彼とは、金徳振氏の一件と一緒に仕事をすることがある。心の中で、統一教会にもいい人があるんだな、とかつて抱いた思いがよみがえってきた。本の出版前に彼に会っていれば、こんな馬鹿なことはしなかったかも、という悔悟の気持ちがわいてきた。

その日はそれで別れ、その後彼と二、三回会って話をした。

彼は最後に会ったとき、日本の兄弟たちが先生の本で相当苦しめられている、とポツリと言った。私は「何言っているんだ。今まで俺を疎外したくせに。日本の兄弟が苦しむのは、先生に対する復讐なのだ。ざまあみろ」という気持ちに戻った。

それから少し経ったある日、安氏から電話が入った。また会いたいという。

会ってみると、彼は真剣な表情でこう切り出してきた。

『朴先生と一緒に日本で本を出版した人たちが、政府のある高官と手を組んで、朴先生の本を韓国語に翻訳し二、三百万部を韓国中にばらまき、統一教会を壊滅状態に追い込む。それをやめさせてやるから、二、三百億ウォンを自分たちに払えと脅迫してきた』

驚いた私は、彼の顔をじつと見つめていると、

『自分は、政府の関係者を通して、金大統領がそのようなことをするのかと尋ねたところ、そういうことはないと言われた。もし、それが本当なら恐喝で彼らを牢屋に入れる、と言われたそうだ』

私は、心臓が止まるほどの驚きを覚えた。

『朴先生は、その一味に加担しているのですか』

たしかに、私は、先生をやっつけようとしたが、それは私憤からである。それが、仲間利用されて統一教会を恐喝し、金儲けの道具にされていることを知り、義憤と落胆が交錯した。だが、安氏は私を咎めなかった。彼は、逆に私をなぐさめてくれた。人間とはおかしなものだ。悪口を言われると、『何を！』と対決する力が出るが、過ちを怒らないでかえって慰められると、何か悪いことをしたような反省の気持ちにさせられる。

さらに、少し日が経って、安氏ともう一度会った。

『日本で反対派が、先生の本を利用して兄弟たちを苦しめている』
最初にそれを聞いた時は、〈ざまあみろ〉という気持ちだったが、それが金儲けのための道具に利用されていると聞いた後なので、私の心は複雑だった。ちょっと可哀想な気がして、良心の呵責を覚えた」(231～234ページ)

朴氏は、単なる「個人的恨み」を晴らそうとする動機から出版しようとしたのです。ところが、その本を、心ない一部の反対派の人たちに悪用され、しかも自分を出し抜いて、本人の知らない水面下で統一教会に脅迫まがいのことをしていることを知って興ざめしたというのが、朴氏が悔い改めた第一の理由だったのです。

おそらく、孤独な自分の味方と思っていた反対派からの「裏切り行為」に出会い、統一教会のときに感じた「愛の減少感」以上の疎外感や空虚感を感じたのでしょう。もちろん、そこに至るまでには、嘘をついてしまったことに対する良心の呵責から来る「後ろめたさ」と、安炳日氏の心温まる「心のケア」があったのは言うまでもありません。

そして、朴氏が悔い改めた2つ目の理由は、『私は裏切り者』の中に書いていることですが、安氏から紹介されて日本の世界日報社社長の石井光治氏と会い、統一運動の現状を聞かされ、さらにアメリカにまで渡って視察して回ることによって、かつて興南の収容所

で文師から聞かされていたことが現実のものになっている姿をまざまざと見せつけられ、深く感動したことが挙げられます(『私は裏切り者』237～248ページ)。

そして、第3の理由として、拙著『統一教会の正統性』(広和)を読み、特にイエスの歩まれた生涯と文師の歩まれた半生が、あまりにもよく似ていることを知ったことが一因でもあったことです(『私は裏切り者』248～251ページ)。

このように、朴氏は悩んだり苦しんだり、また仲間から裏切られたりして心の傷を受け、安氏の「心のケア」を受けて、やっと立ち直ることができたのです。

それにもかかわらず、浅見定雄氏は、「(朴氏は)日本で本を出したりすれば大金が入ると思っていた期待が裏切られたため、再び統一教会へ寝返ったというだけの話」(『統一協会ボデイコントロールの恐怖』かもがわ出版、37ページ)と切り捨てています。あまりにも人の心を踏みにじる発言であると言いがありません。

朴正華著『六マリアの悲劇』(恒友出版)は、反統一教会派の人々の甘い誘いに乗せられてしまった著者が、まるで「魔がさした」かのごとくに出版してしまったデッチ上げの書なのです。

ところが、日本で出版された『六マリアの悲劇』が、反対派の主導によって韓国語に翻訳される作業が行われ、1996年3月1日付けで『野録統一教会史』(큰샘출판사)

として韓国で出版されたのです。

この『野録統一教會史』の出版は、朴正華氏の本意ではありません。悔い改めて統一教会に再び帰ってしまった朴氏に「秘密」にして、反対派が出版に漕ぎ着けてしまったものです。事実、この『野録統一教會史』に掲載されている朴正華氏の「前書き」部分は、『エマリアの悲劇』の「あとがき」を一部削除し、それをそのまま転載し、著作日付も1993年10月の古いままになっています。著者の意向を完全に無視して出されたためです。その事実を知った時点で、朴氏は「その出版は本人の許可なくして出したもので、違法に当たる」として法的訴えを起こしました。

しかし、満83歳という高齢であった朴氏は、係争中、志半ばにして、97年3月26日に亡くなりました。その2か月前の1月に、念願し続けてきた「祝福」を受けています（「ファミリー」1997年5月号、4ページ）。

ところが反対派は、それらの事の成り行きを知らない統一教会信者に対し、『私は裏切り者』が1995年11月1日に世界日報社から出された後で、1996年3月1日に、韓国語に翻訳された『野録統一教會史』が出版されていることから、「この出版が新しい事実から見ても、『私は裏切り者』は統一教会が勝手にでっち上げて出版したものだ」と脱会説得をすることもありました。これなどは、反対派のあくどさを表すものです。

出版事情をひた隠しにする、このような手法は、反対派全体に見受けられる傾向です。例えば、1997年8月20日付で出版された浅見定雄監修『統一協会ボディコントロールの恐怖』（かもがわ出版）でも、こういった出版事情のあることを無視し、さも『エマリアの悲劇』には真実が書かれているかのような思わせぶり、文師に対するゆがんだ情報流し続けているのです。

その浅見定雄氏は、『エマリアの悲劇』について、「この本の最大の意義は、著者の朴正華氏が統一協会の創立以前から文鮮明の片腕だった人であり、文鮮明の『血分け』（『復帰』という）の乱行の生き証人であるという点にある。著者は自分自身も文鮮明の指示で血分けを実行させられたと告白している。この本で明らかになったことはたくさんある……」（『統一協会ボディコントロールの恐怖』14ページ）として、書いた当の本人がすでに取り下げているにもかかわらず、真相が明らかにされた後も、なお、その著者の意向を完全に無視して著述し続けているのです。これが反対派のやり方なのです。まさに「嘘も百回言えば真実になる」を地で行っているのです。

文師や統一教会は長い間、何の証拠もないのに、キリスト教関係者や反対派グループから、「淫行の教祖」「血分け教」と言われ続けてきました。それは、初代キリスト教会時代においても同様でした。極めて古い初期の頃からユダヤ教側が、「イエスはローマ兵士パ

ンテラと母マリアとが、姦淫の罪を犯して生まれたいかがわしい人物である」と噂し始め、その噂はなかなか止まず、何とオリゲネスがAD248年頃に書いたとされる『ケルソス駁論』^{ばくろん}においてさえ、まだ弁明し続けなければならなかったほどです。

キリスト教会も、近親相姦をしているとか、いかがわしい儀式をしているとか、長い間、噂された歴史的事実がありました。それが同じ状況を統一教会に対する、血分けの中傷に感じます。